

# 沿岸漁海況調査（昭和43年度）

野沢正俊 山崎廉三

NO. 2 鳥取丸

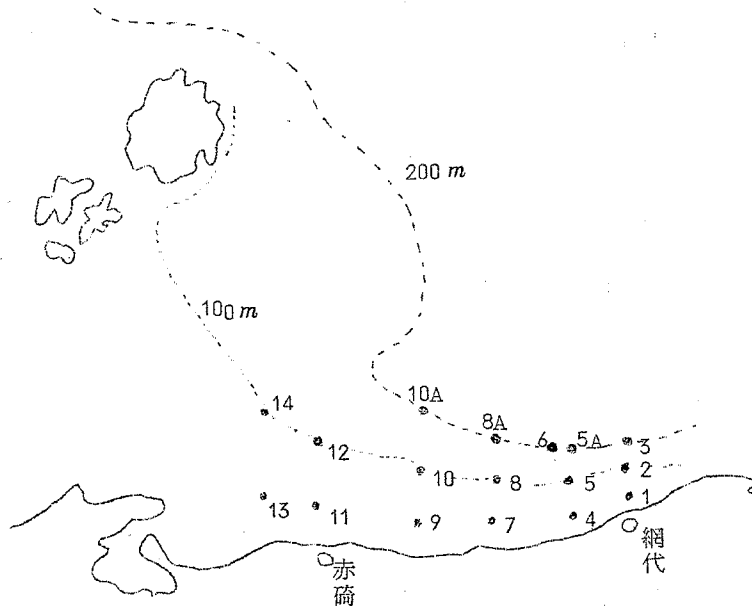
前年度に引き続き沿岸漁海況調査を実施した。

## 調査方法

### 海況調査

試験船第2鳥取丸（19.86トン デ100PS 乗組員4名）を使用し、図1に示す定点について海洋観測法により調査した。

図1



st.	1	2	3	4	5	5A	6	7	
E	134°17'	〃	〃	134°10'	〃	〃	134°06'	134°00'	
N	35°36'	35°40'	35°44'	35°35'	35°39'	35°43'		35°34'	
st.	8	8A	9	10	10A	11	12	13	14
E	134°00'	〃	133°52'	〃	〃	133°40'	〃	133°29'	〃
N	35°40'	35°44'	35°34'	35°41'	35°45'	35°35'	35°45'	35°36'	35°46'

## 海況調査

県下中核漁港である網代（東部）泊（中部）赤碕（西部）の3漁協から毎日の漁況を収集した。

### 調 査 結 果

海況調査における観測結果は、別報資料のとおりであるが、調査の結果はその都度必要事項を関係先に通報するとともに、県下の3漁協からの漁況収集とあわせ、毎旬海況速報として関係先に通報したが、その概要はつきのとおりである。

#### 海況の推移

4月：年間低極期を脱し、水温上昇期を迎えたが、垂直混合はなお続き、水温は0m層12～14℃台、50m層11～12℃台、100m層7～11℃台で、これを昨年にくらべると、全域とも1℃低目の低温海況となっている。20m層および50m層の6t分布からも、沿岸域の暖流東流はみられず、全般に対馬暖流沿岸流の増勢は遅れており、東部は柴山沖にある小規模冷水域の影響もあり、沿岸暖流の弱勢はそのまま春漁期の遅れ、または漁期の縮小をもたらした。

5月：水温は0m層14℃台、50m層13℃台、100m層12℃台で、やや春型の水温分布となったが、75m層以浅は39年以降の最低水温値を示し水温上昇期にあって約半月遅れの海況推移であり、漁況への影響が憂慮された。6t分布図からも沿岸域における暖流は20m層で接岸東流が東部にみられ、網代沖には孤立性小規模暖水域がみられるが、50m層では長尾鼻以西は平年にくらべやや低く、以東はやや高い複雑な海況を呈し、前月紫山沖にみられた小規模冷水域は大きな変化は認められないようである。

6月：水温は順調に昇温し徐々に回復気配をみせ、平年にくらべ高目の水温も局部的にみられるが、全般にはなお低目が持続され、0m層19～20℃、50m層16℃台、100m層14～15℃台である。6t分布図の20m層には長尾鼻沖に冷水域がみられるが、50m層では後退し暖流の東流がみられる。とくに賀露沖7～11渚（水深100～200m線）が強流帯で、透明度は東部が高く中部が低い値を示した。4月以来の紫山沖冷水域は引続き存在するが動きは小さくなっている模様である。

7月：水温上昇率の最高期であり、夏型海況に近づいており、0m層20～22℃台、50m層16～18℃台、100m層11～15℃台である。0m層はほぼ平年並であるが、50～100m層は1～2℃低目で、とくに対馬暖流中層水の流動を知る上に重要であり、暖流の大勢を示す

50m層水温が低温であることから、依然暖流勢力は弱勢とみられ、 $\sigma_t$ 分布図からも沿岸域の暖流はやや沖合を東偏流している。垂直分布図から躍層が20m層と150m層に形成されているが、海況からくる漁況不振は今後も持続されると考えられる。

8月：水温は0m層25~27℃台、50m層18~20℃台、100m層17~18℃台で0m層100m層はほぼ平年並に回復しているが、対馬暖流中層水塊の中心に相当し海流状態を表示する50m層水温は、平年にくらべ2℃前後低目で漁況への影響は大きいことが推測される。垂直的な水温配置は賀露沖11埋付近で30~50m層に4℃、100~150m層に10℃におよぶ水温傾斜がみられ、他の水域にくらべ顕著な躍層となっている。 $\sigma_t$ 分布図では20m層では西流がみられ流速は極めて速く、50m層では沿岸域では東流がみられるが、中部に冷水域がみられ変化は激しく上層と中層では二重汐の発生となっている。

9月：年間水温最高期であり暖流増量期であるが、この期間は短期で水温下降期に推移した。水温は0m層24℃台、50m層19~20℃台、100m層14~16℃台で平年にくらべると2~2.5℃低目であるが、東部では柴山沖の暖水域が勢力を増し、この影響が現われて1~1.5℃の低目に止まっている。垂直分布図をみると、躍層は先月ほど顕著ではないが、30~50m層および100~150m層にみられる。また、 $\sigma_t$ 分布図では20m層では8月同様西流がみられ、50m層では東流となり沿岸域は流速が速くなっている。下旬26・27日には東部で苦汐の発生がみられ、タイ、ハモ、ホウボウ、イタヤ貝などの底魚類の弊死浮上がみられた。

10月：早期秋型海況に移行したが、水温下降はゆるやかで、低水温を続けた水温上昇期の海況も、下降期に入って回復の兆をみせはじめた。0m層20~21℃台、50m層18~21℃台、100m層15~16℃台で、平年にくらべると0m、50m層とも東部では若干低目の水域もみられるが、中西部では逆に若干高目、100m層では1℃低目となっている。また、中~西部の10~20埋沖合では高目の水域が広がっている。水温垂直分布図をみると、9月に引き続き50~75m層および100~150m層にみられる。また $\sigma_t$ 分布図では20m層は単調であるが、50m層では複雑で中部沖には暖水域がみられ沿岸域で9月とは逆に西流となっている。

11月：水温50m層までは垂直混合がみられ、水温垂直分布図からもほとんど水温変化はみられない。0m層19℃台、50m層19℃台、100m層16~19℃台で、0mおよび100m層は平年並、50m層では若干低目であり、100m以深では平年より2~3℃高目で、この傾向は東西部でとくに顕著である。 $\sigma_t$ 分布図は20mおよび50m層とも流況は単調である。

## 漁況の推移

4月：スルメイカは例年より1旬早く、中旬より来游をみせ漁場は全県沖に拡張され、1隻当たり78～245Kgと旬を追って好調となった。ハマチは日間船間変動が大きく、1隻当たり15～70Kgで昨年同期より上廻った。

キスは中部の漕刺網で主として漁獲されているが、1隻当たり9～10Kgと低位であるが、比較的安定度のある漁況を呈した。タイは1隻当たり15～80Kgで、西部がとくに活況を呈した。

5月：海況年変化のずれに伴って沿岸暖流性魚の漁期の遅れが顕著となってきた。スルメイカは一般に低温年、成熟率の低い年は豊漁型を呈するが、1隻当たり50～260Kgと全県で活況となった。ハマチは1隻当たり10～270Kgと前月同様日船間変動が大きく、昨年同期を下廻った。トビウオは初漁期の若干遅れがみられ、下旬に入って1隻当たり40～170Kgがみられた。シロイカは海況の影響で来游はみられず、本年の特異現象で好転の兆はみられない。キスは1隻当たり5～10Kgで漁場範囲は狭いが、ほぼ安定漁況となった。タイは1隻当たり5～20Kgと西部が前月に引続いて好況である。

6月：半月遅れの海況推移で、魚種による好不調が目立っている。スルメイカは1隻当たり25～80Kgで、全県にみられたが旬を追って低調を示した。ハマチは1隻当たり130～270Kgであるが、散発的で下旬には低調となった。トビウオは産卵来游資源豊度が高く、1隻当たり90～900Kgと昨年の倍増を示し、暖流性魚の中では最も好調となった。シロイカは引続き不調で来游が遅れている。シイラは漬木投入は完了したが海況の影響で来游はみられていない。キスは1隻当たり10～13Kgで安定漁況が続いている。ヨコウは下旬より中部でみられたが1隻当たり1Kgで低調である。

7月：低温海況がもたらした漁期の遅速長短、魚種による不好調が可成りはっきり示された。スルメイカは1隻当たり10～70Kgと低調であるが、トビウオは産卵来游量が多く昨年の倍増をみせ、1隻当たり80～670Kgと好調を呈した。シロイカは今年よりみられ、1隻当たり1～10Kgでなお不調である。シイラは来游が遅れ、中旬に入って1隻当たり45～150Kgで昨年の半分にも満たない低調となった。ハマチは1隻当たり30～280Kgで、ハマチ仔が主体である。タイは1隻3～15Kgである。

8月：夏枯れ期に入って暖流中層水の低温海況から低調となっている。スルメイカは1隻当たり1～4Kgと低調である。シロイカは1隻当たり1～20Kgで下旬に入ってやや活況を呈してきた。トビウオは昨年の2倍の好調で、昨年より若干遅く上旬終漁した。ハマチは1隻当たり10～90Kgで日

船間変動が目立っている。シイラは1隻当り40~740Kgで昨年の60%程度で低調である。イタヤ貝は砂丘水深45~50mの狭い範囲で、1隻当り30~40箱で殻長は70~75mmで小型が多い。タイは1隻当り3~21Kgである。

9月：早期秋型海況となったが、低温海況で暖流性魚のほとんどが不調である。スルメイカは1隻当り10~130Kgで、昨年同期より大巾に上廻った。ハマチは汐流早く底刺網漁業が不可能となった。シイラは1隻当り12~250Kgで低調であるが、隠岐北方海域において底曳船による曳釣では釣獲が良く、魚群回游の主経路は対馬暖流第2分枝帯であろうと推察された。この不調から、イカ釣転換船が下旬には続出し終漁となった。シロイカは1隻当り2~10Kgで低調である。

アカイカは例年8月下旬初漁をみるは、低温海況から全くみられていない。イタヤ貝は上中旬砂丘沖を中心とする局地的範囲であったが、下旬東方に移行し、1隻当り264~351Kgで前月同様小型が主体である。タイは1隻当り12~24Kgである。

10月：下旬低気圧通過で出漁が制約され漁況は不振である。スルメイカは2~278Kgで東部で活況を呈した。シイラは上旬1隻当り80Kgで終漁となった。シロイカは1隻当り2~11Kgで低調が持続している。ハマチは1隻当り3~168Kgで日船間変動は大きい。ヨコワは中旬1隻当り5~9Kgと僅少でまたソーダカツオが上旬若干みられた。アカイカは上旬量的には僅少であるがみられたが、海況から不振が続いている。イタヤ貝は上旬1隻当り80Kgと大巾に前月を下廻った。タイは1隻当り1~24Kgである。

11月：水温の回復から漁況もやや持ち直した。スルメイカはアカイカと逆相関がみられるように1隻当り2~326Kgで、下旬に入って漁場は沖合化したが大和堆資源豊度が密であったこと、沿岸南下群は日本海中部で遅れていること、スペントイカが少ないことなどから、初期における来游は沖合添加移動群とみられ活況を呈した。シロイカは1隻当り3~41Kgで急増し可成り好調となった。ハマチは1隻当り2~153Kgで中西部の急増が目立った。サワラは1隻当り6~9Kgと低位安定漁況を示した。ヨコワ、アカイカ、カツオはほとんどがみられない。タイは1隻当り1~23Kgである。

12月：下旬暖冬気配もあり好天に恵まれ、昨年より出漁日が多かった。観測は実施していないが、かなり変化がみられ、漁況に好結果をもたらしたものと推察される。スルメイカは1隻当り78~420Kgと平年以上の好調となった。シロイカは1隻当り53Kgで西部の活況が目立った。ハマチは1隻当り86~522Kgでとくに中部に集中した。タイは1隻当り8~17Kg、キスは中部で10~14Kg、サワラは西部で5Kg、カマスは東部で80Kgとなった。

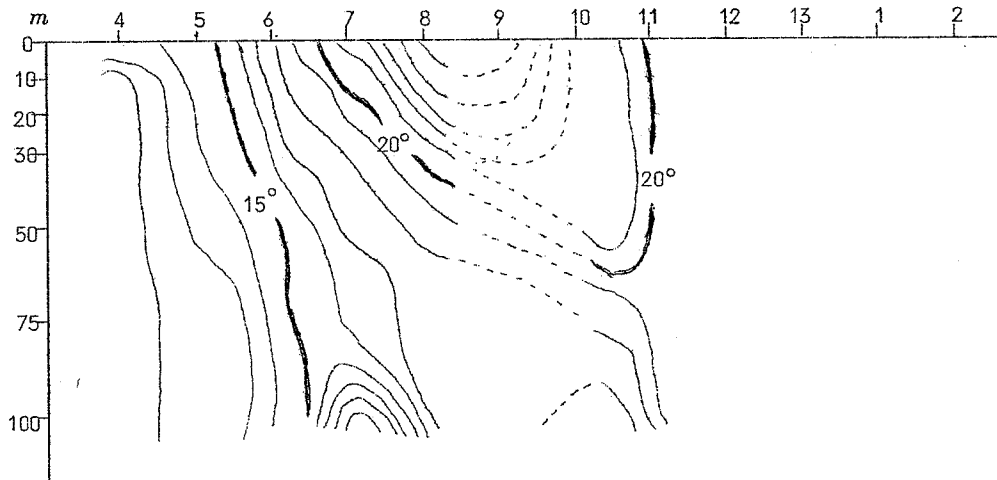
1月：天候急変、季節風の連吹で、東部は漁獲皆無の現象を呈し全般に低調となった。スルメイ

カは1隻当り420Kgと資源豊度は高く、ハマチは1~100Kgである。イタヤ貝はこの時期としては特異現象であるが、1隻当り3~29Kgで由良沖が中心となった。タイは1隻当り7~25Kg、キスは中部で15~67Kgと好調となった。

2月：東部で低調であるが、中西部が中旬この時期としては活況を呈した。ハマチは1隻当り187~362Kg、マルゴは250Kg、キスは3~17Kg、タイは6~26Kgである。

3月：上旬ハマチがとくに活況を呈し、1隻当り37~990Kgと昨年を大きく上廻った。キスは1隻当り13~15Kg、タイは1~20Kg、イサキは41Kgである。

図2-1 赤碓中 st.12 水温季節的变化



網代沖 st. 3 水温季節的变化

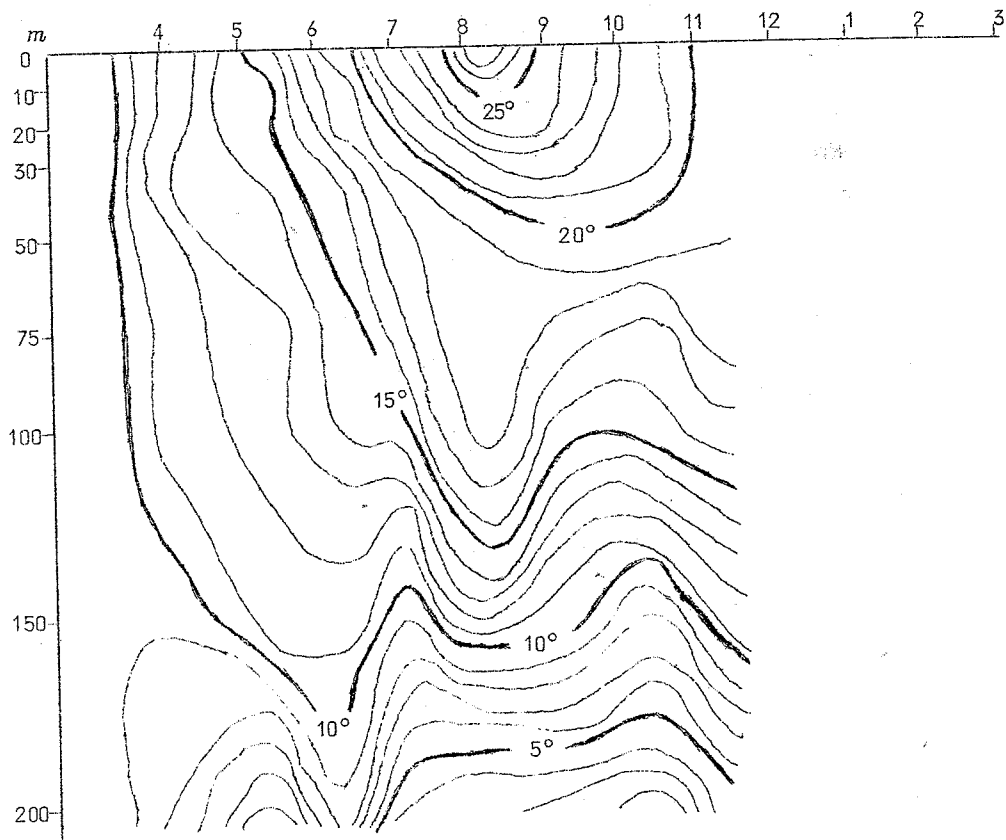


图 2-2

青谷沖 st. 8 水温季節的变化

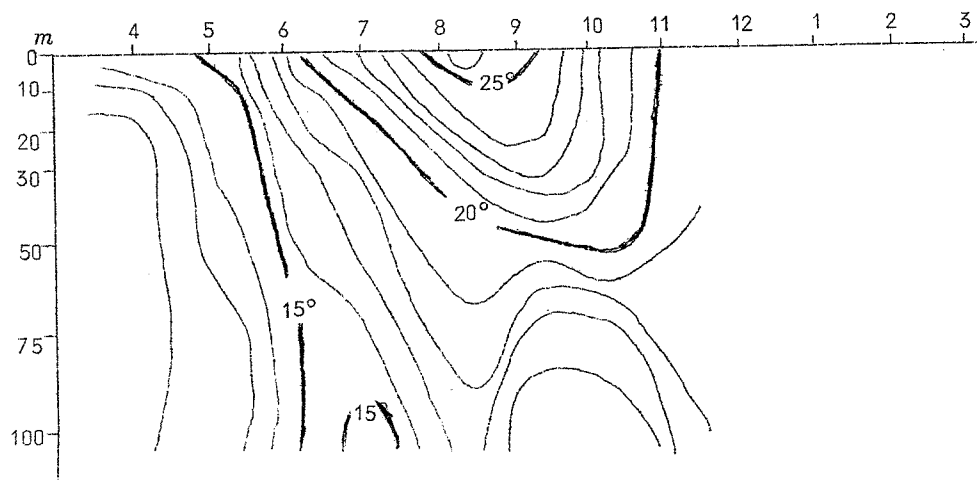
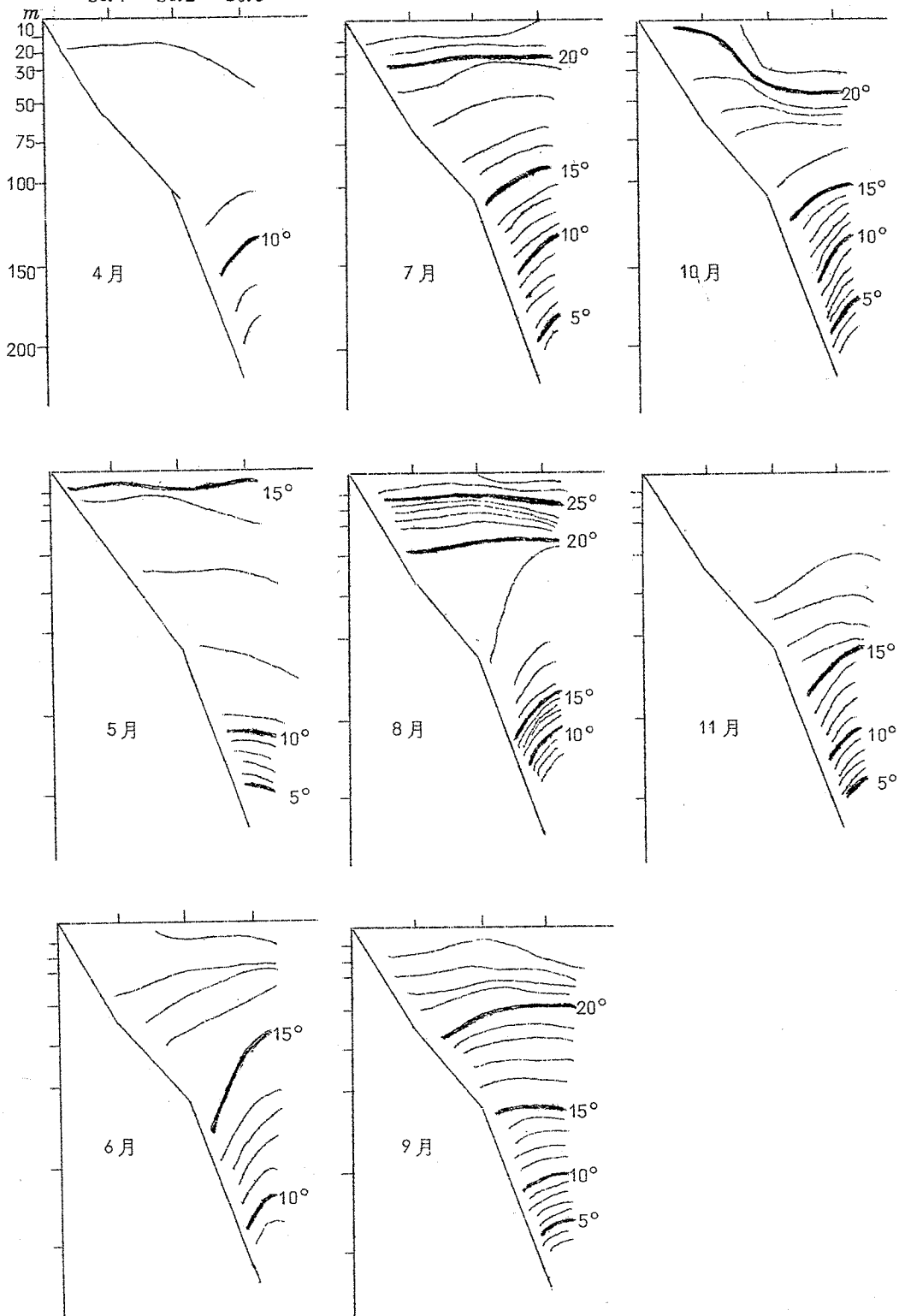
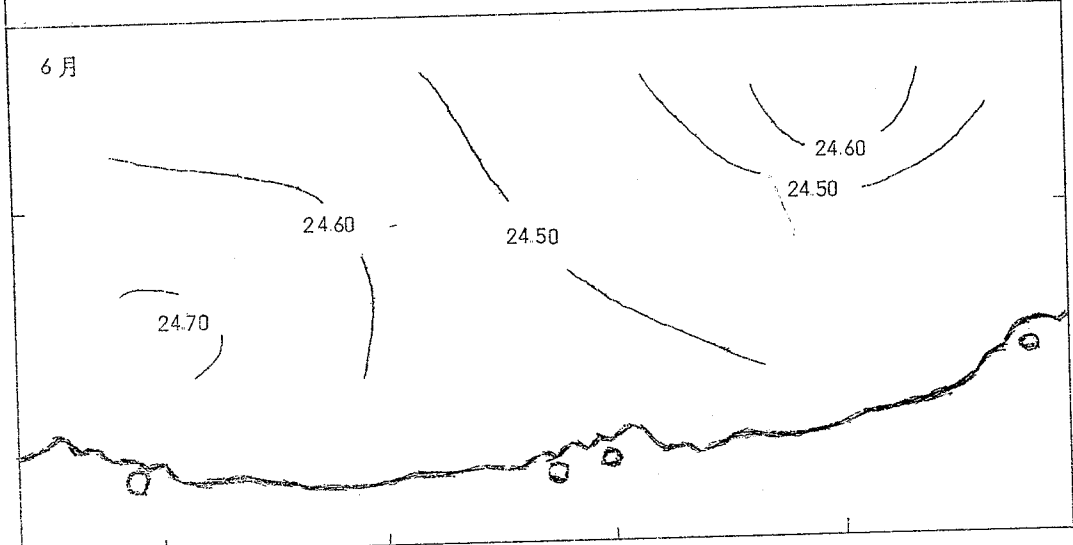
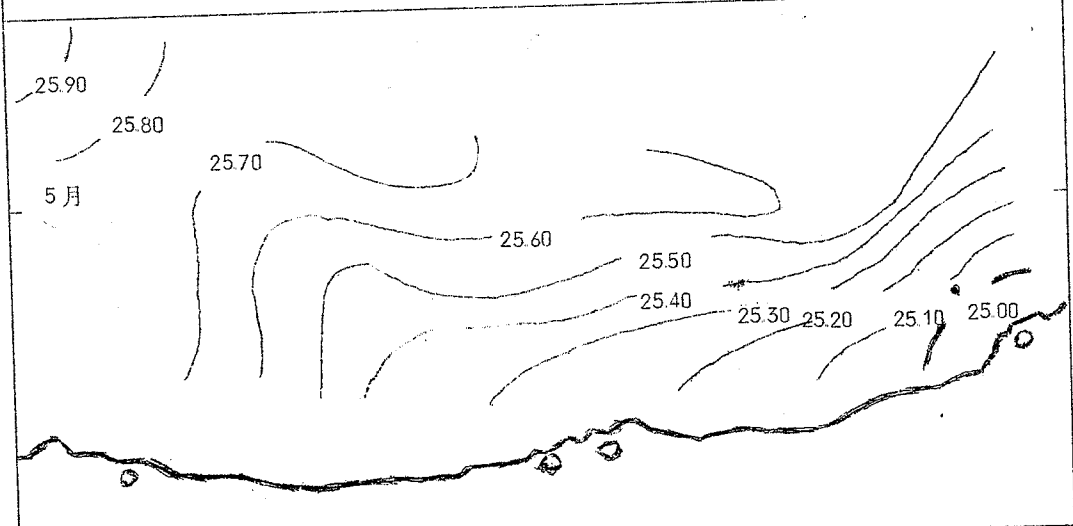
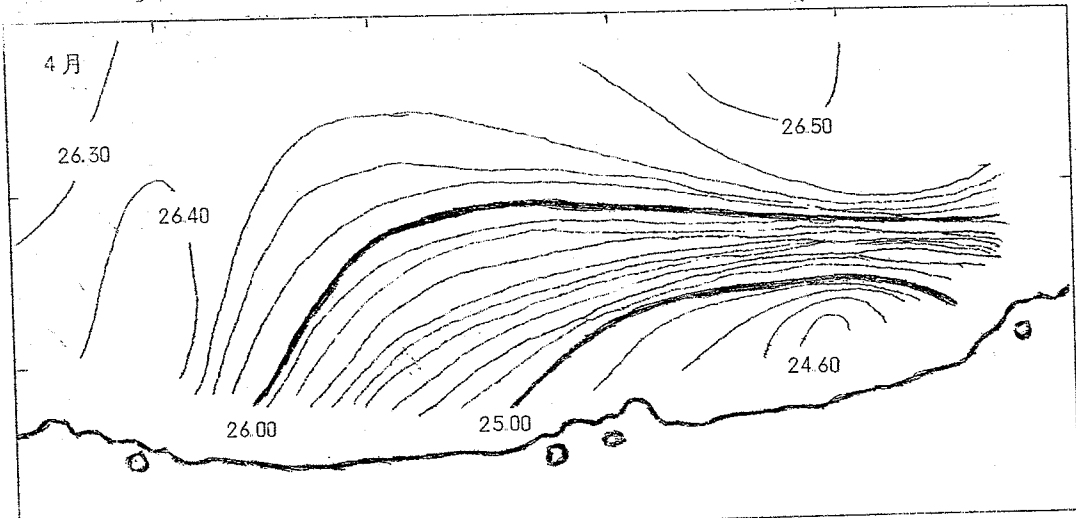


図3 網代沖沿岸定線水温垂直分布  
st.1 st.2 st.3







0 m 層  $\delta_t$  分布

图 1-2

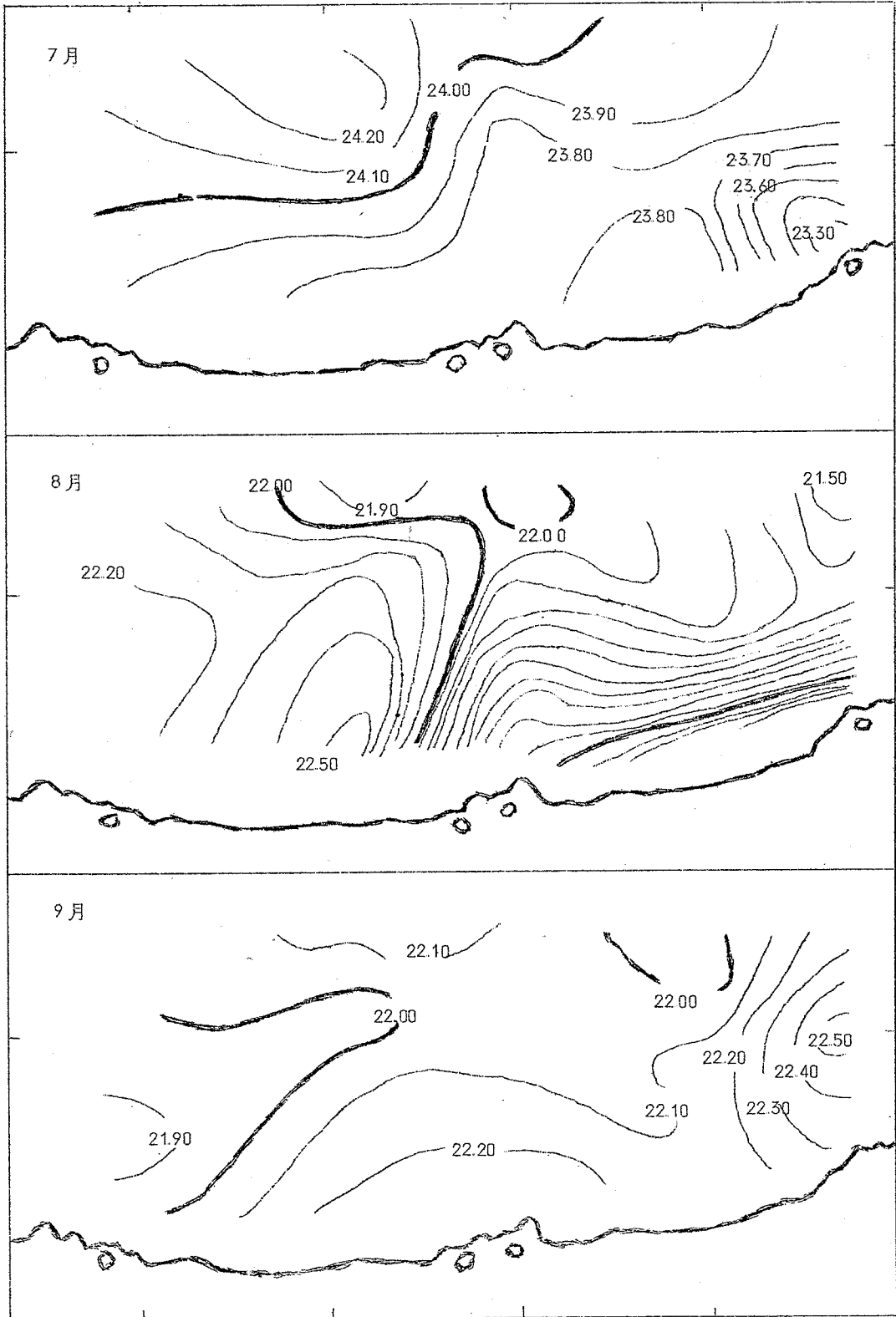
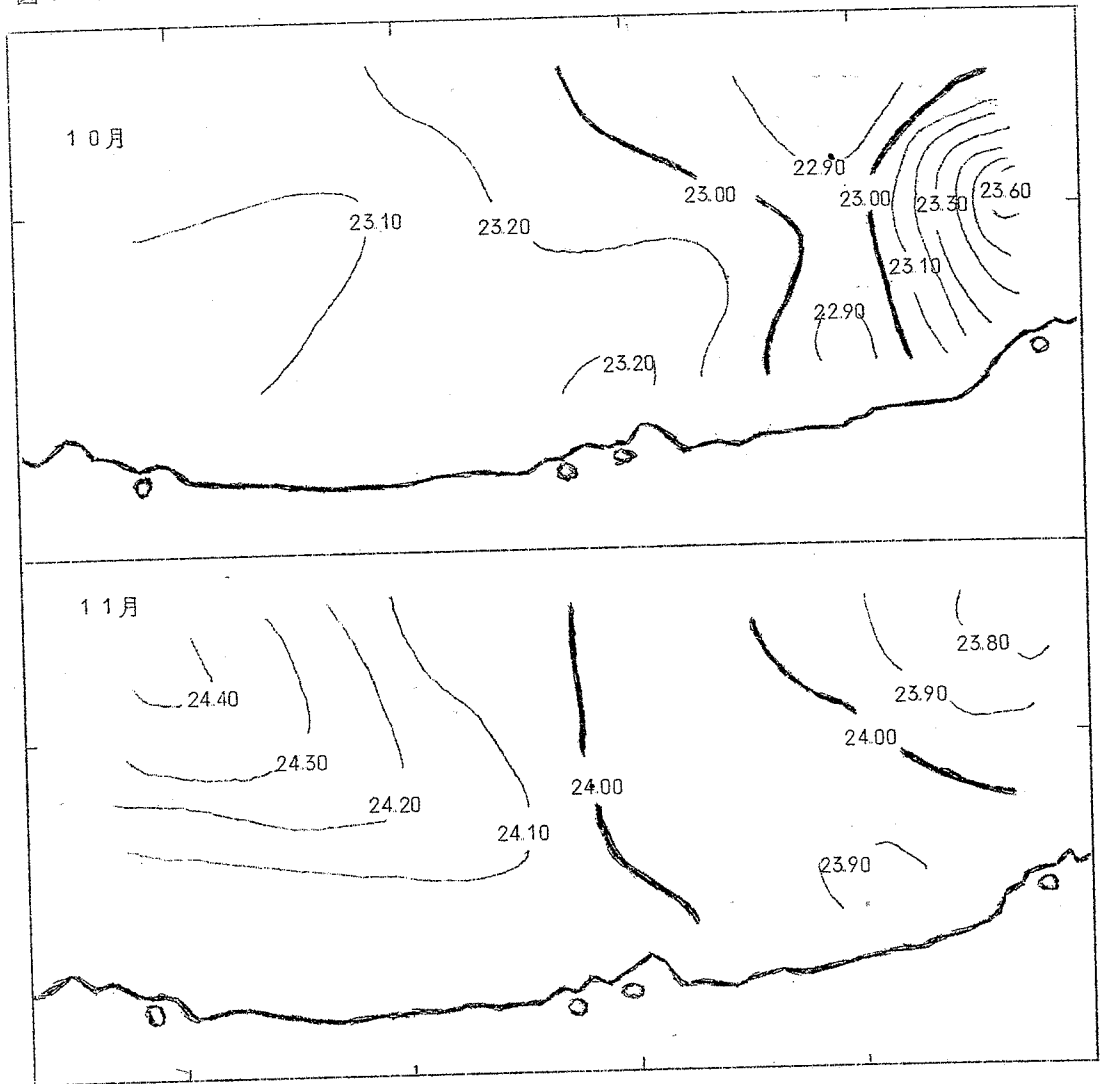
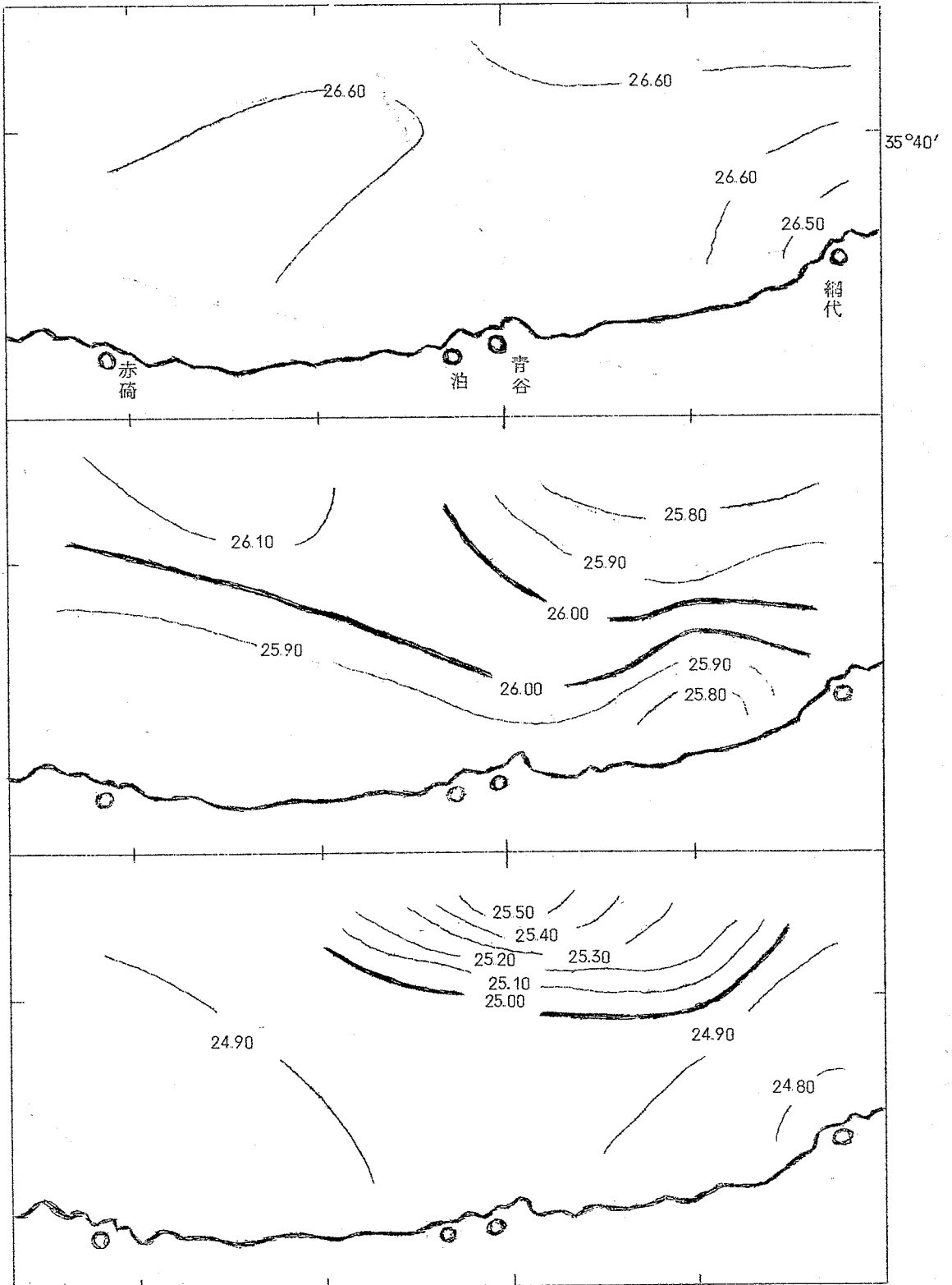


图 4-3



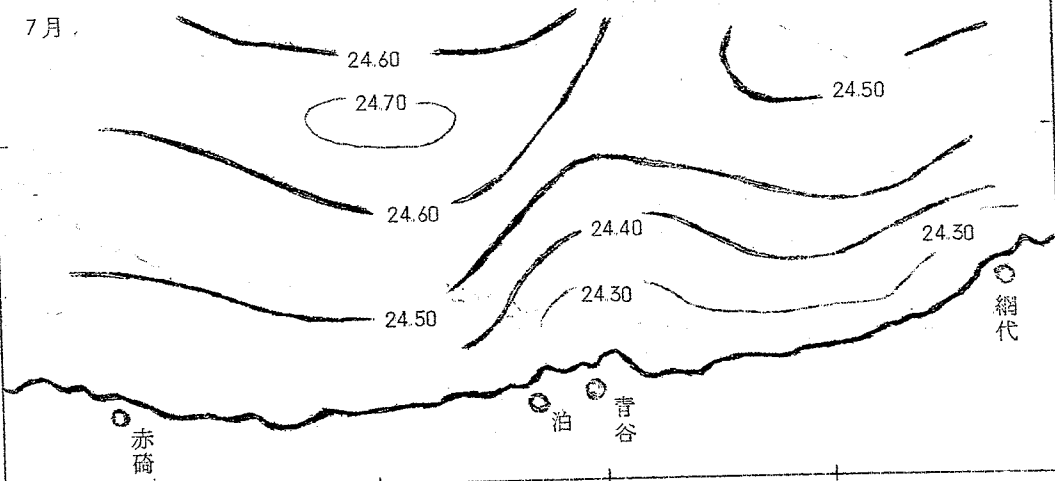
0 m 层  $t_0$  分布

図 4-4

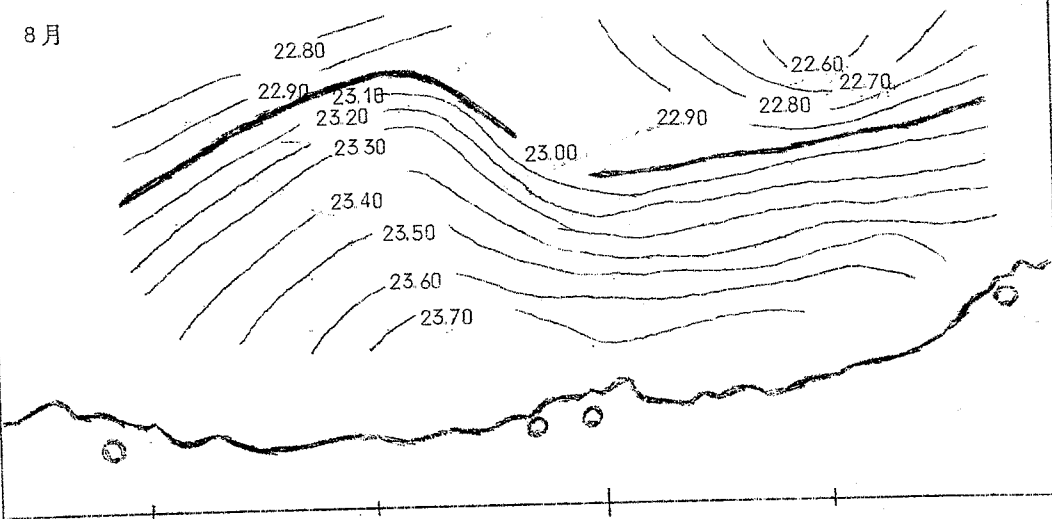


20 m層  $t$  分布

7月



8月



9月

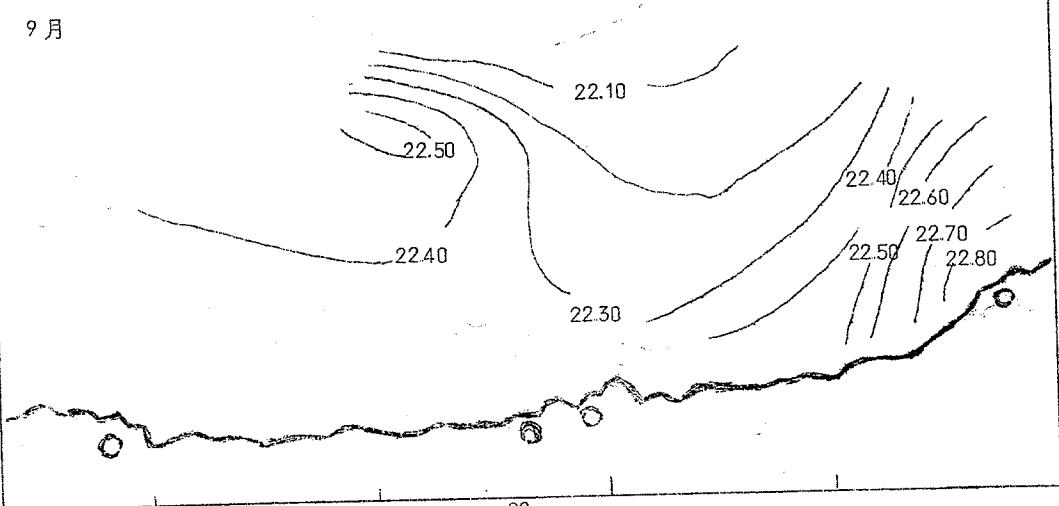
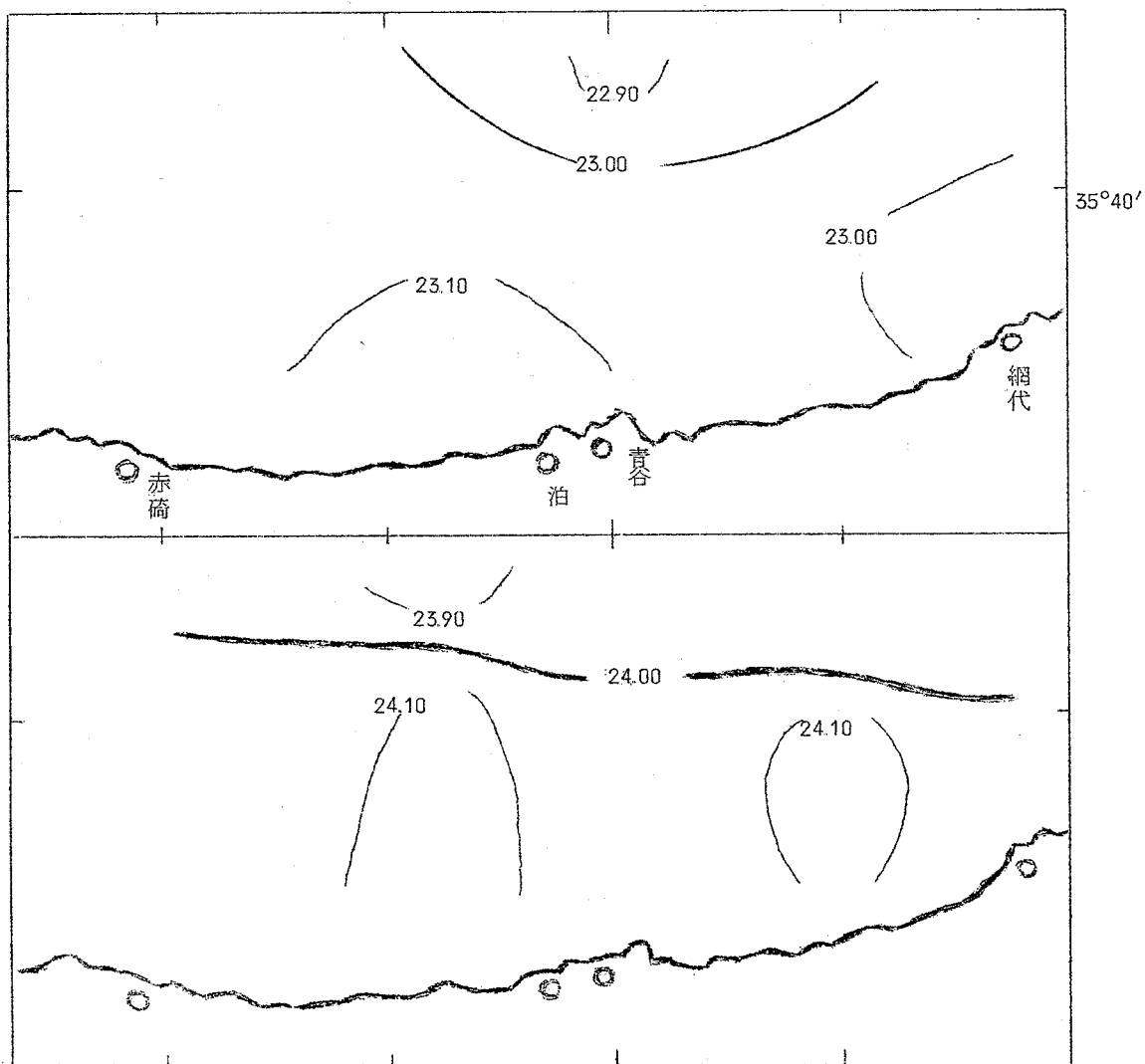


図 4-6



20 m層 6<sub>t</sub>分布

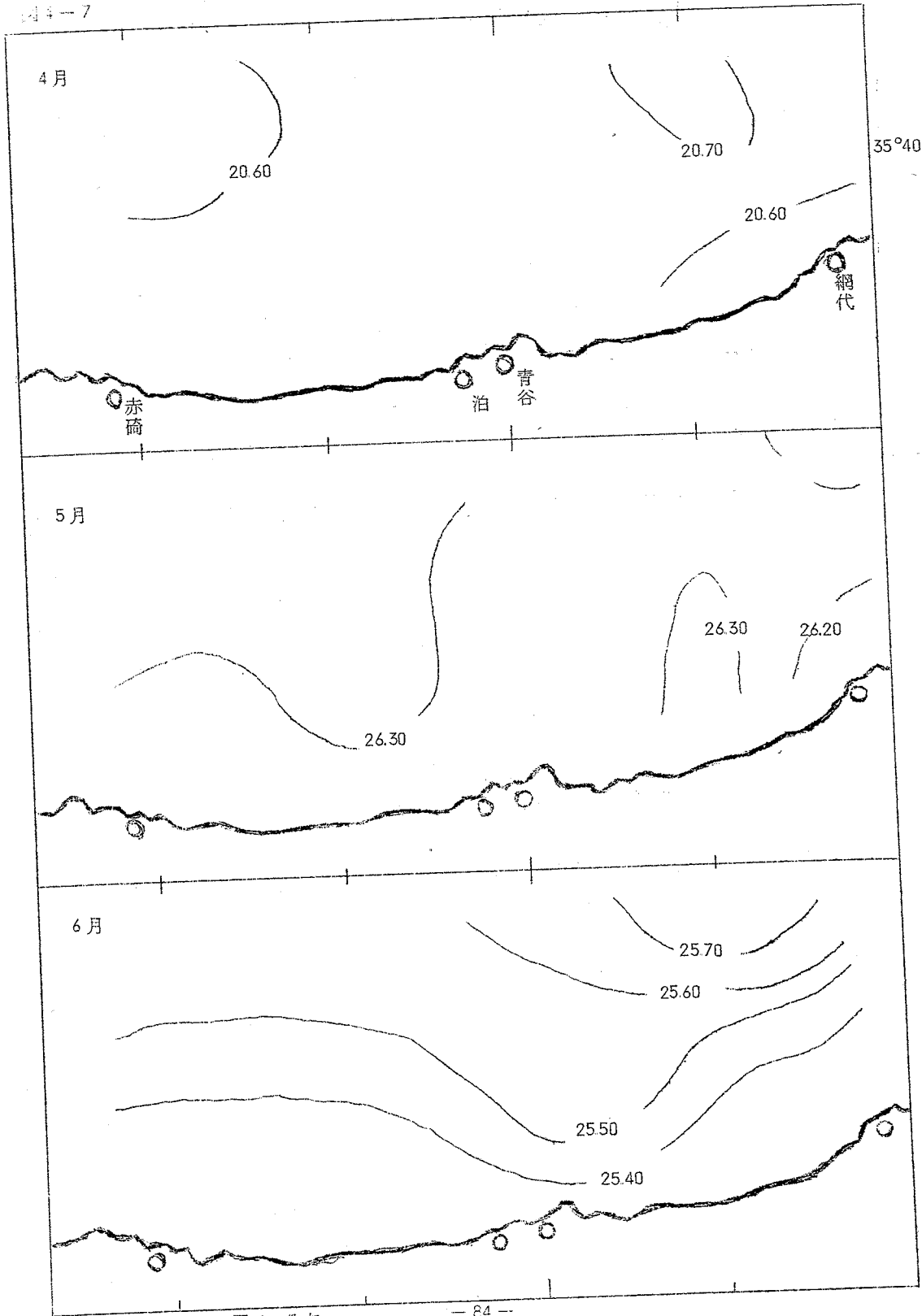
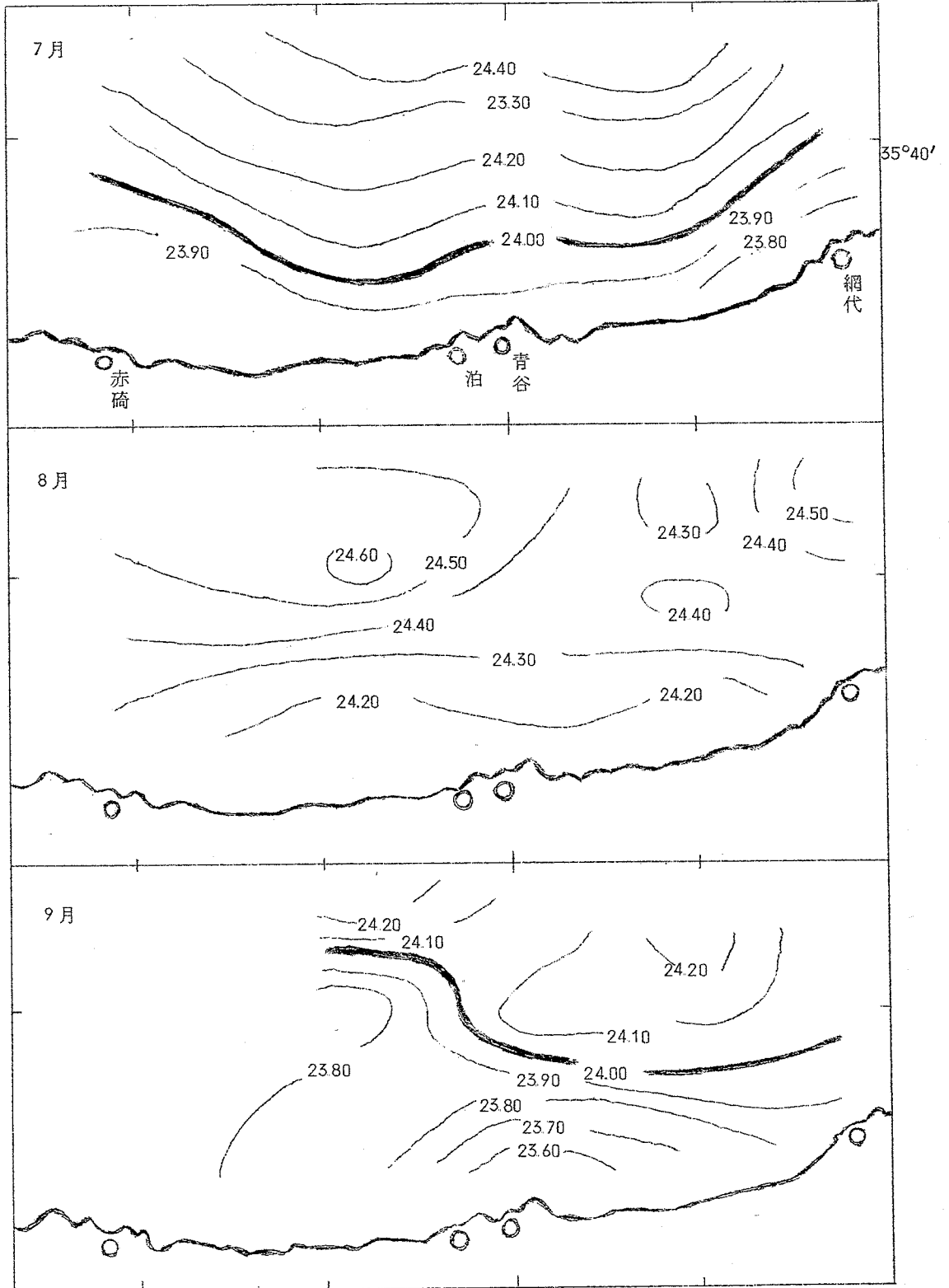


図 4-8

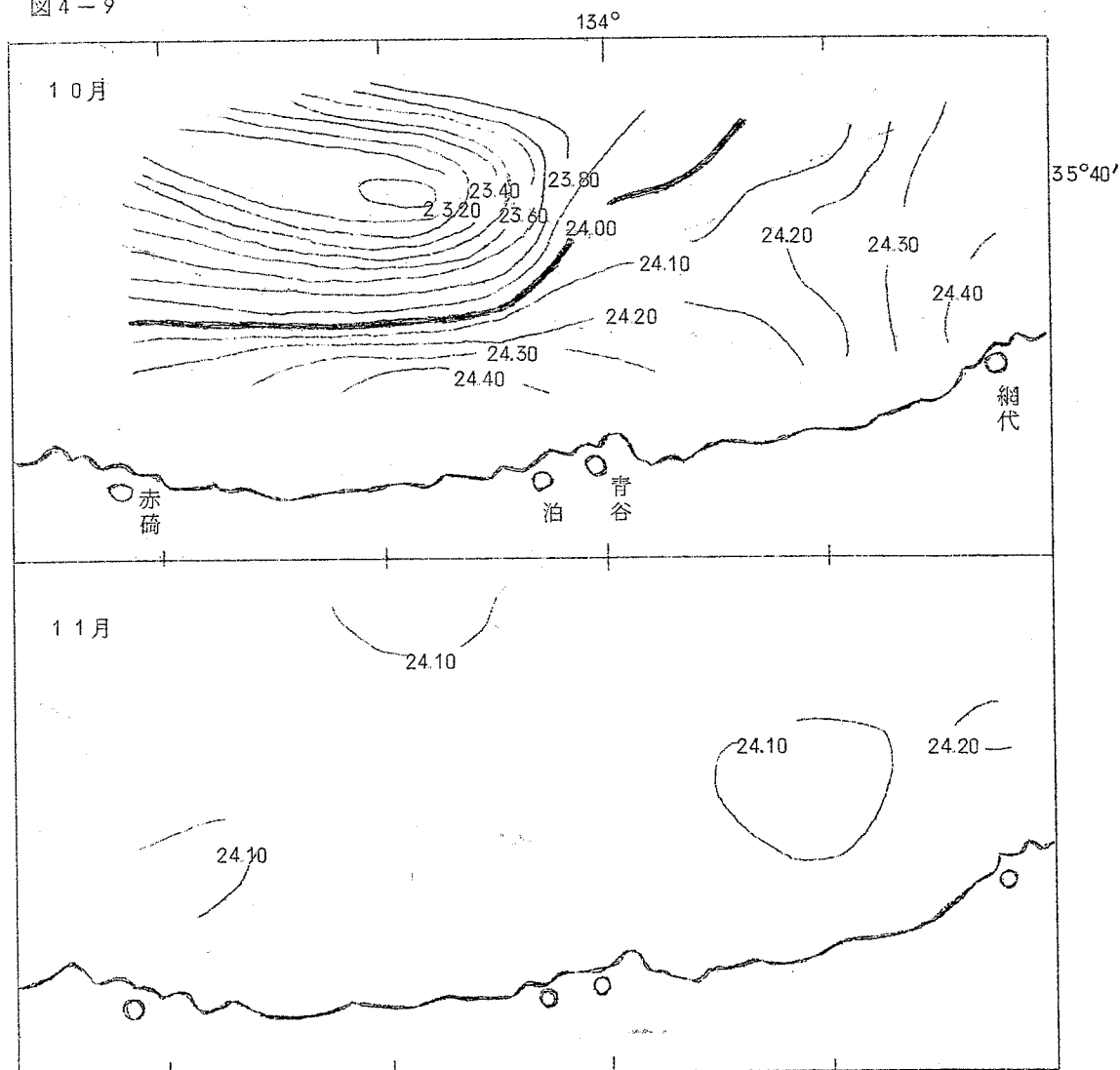
134°



50 m層  $\delta_t$  分布



図 4-9



50 m層  $\sigma_t$  分布